

7年ぶりに行われた肺非結核性抗酸菌症 全国調査結果について

倉島 篤行

キーワード：肺非結核性抗酸菌症，全国調査，罹患率，*Mycobacterium avium complex*，*Mycobacterium kansasii*，*Mycobacterium abscessus*

近年全世界的に肺非結核性抗酸菌症の増加が指摘されているが，わが国の本症罹患率や有病率は国際的に見て最も高いレベルであると推測されてきた。しかし，わが国における本症の全国的調査は非結核性抗酸菌症研究協議会が2007年に行った以降は皆無であった。本症の全国調査は1968年，当時の国立療養所非定型抗酸菌症共同研究班が全国の13施設の国立療養所で行ったのが最初である。全国統計である結核症罹患率との対比で本症の推定罹患率を算出したのは1980年であり，その時に1971年からのdataを改めて計算し，1971年は0.89であり，1980年は1.51であった。以後，国立療養所非定型抗酸菌症共同研究班は，1997年まで毎年の全国サーベイから本症推定罹患率を26年間継続的に発表してきたという国際的に類例のない業績を残してきた。

この後，非結核性抗酸菌症研究協議会が2001年と2007年に，全国200床以上の全ての病院へ対象を拡げアンケート調査を行った。2001年調査では6カ月間に受診した新規の肺非結核性抗酸菌症および同期間の菌陽性肺結核症を求め521/2051病院（25.4%）から回答があり，推定罹患率は5.9であった。2007年の調査は，期間は2カ月に短縮し他は同一内容で行われ，回答数は532/2674病院（19.9%）で推定罹患率は5.7であった。

今回，平成26年度厚生労働省厚生労働科学研究委託として新興・再興感染症に対する革新的医薬品等開発研究事業「非結核性抗酸菌症の疫学・診断・治療に関する研究」が承認され，非結核性抗酸菌症の疫学に関する研究の一環として，病院施設を対象とした全国アンケート調査を2007年以降7年ぶりに実施した。

研究班のこの項目に関する班員構成は下記である。

主任研究者：阿戸 学（国立感染症研究所免疫部部長）
分担研究者疫学調査担当：御手洗聡（財団法人結核予防会結核研究所抗酸菌部部長）

研究協力者：倉島篤行（財団法人結核予防会複十字病院臨床研究アドバイザー），長谷川直樹（慶應義塾大学医学部感染制御センター教授），星野仁彦（国立感染症研究所ハンセン病研究センター感染制御部室長），南宮湖（慶應義塾大学医学部呼吸器内科），森本耕三（財団法人結核予防会複十字病院呼吸器センター）

以下，2014年11月4日の第90回日本結核病学会総会抄録原稿提出時以降の，いくつかの追加や修正を含んだ本調査最終確定数値での内容を示す。

方 法

日本呼吸器学会認定および関連884施設に，2014年1月から3月まで3カ月間の肺非結核性抗酸菌（NTM）症と結核症の新規診断数を記入するアンケート調査を実施した。質問項目内容は従来と同じ骨子であるが，診断基準は2008年改訂に合致するものとし，指標疾患としての結核症は菌陽性肺結核ではなく，潜在性結核感染症を除く新登録結核とした。

結 果

回収率は62.3%で，同期間中の新登録結核の診断数は2,327例で，肺NTM症の診断数は2,652例であった。同期間の新登録結核年換算罹患率は12.9であり，肺NTM

症の罹患率は14.7と推定された。肺 *Mycobacterium avium* complex (MAC) 症が88.8%と大多数を占め、*M.kansasii* 症は4.3%、*M.abscessus* 症は3.3%であった。

MACの中で菌種内訳が明らかな範囲での地理的分布は、*M.intracellulare* が北海道では11.1%、東北24.6%、関東23.5%、中部30.9%、近畿36.3%、中国36.7%、四国49.1%、九州59.7%、沖縄66.7%と、緯度と一致した菌種分布割合の変化が認められた。

結 語

2014年のわが国、肺NTM症の推定罹患率は14.7（人口10万人あたり）と、2007年の約2.6倍であり、これは国際的に見て最も高い肺NTM症罹患率である。

著者のCOI（conflicts of interest）開示：本論文発表内容に関して特になし。